唯物論としての「内的体験」
――バタイユにおける「未知のもの」と質料としてのアルケー――

横田　祐美子*

はじめに

本稿の目的は、ジョルジュ・バタイユ（Georges Bataille, 1897-1962）における物質性の問題に着目することで、彼の「内的体験」（expérience intérieure）[1]という思想を唯物論として捉え直すこと、ひいてはこの思想を一種のアルケオロジーとして再解釈する端緒を開くことである。

周知のとおり、物質性というテーマはバタイユの前期思想にあたる著作のうちに顕著に現れている。特に、1929 年から 30 年にかけて発行された雑誌『ドキュマン』に寄せられた彼の論考では、物質や事物、身体などが主題的に論じられていた。これらの大半は美術・工芸作品や自然物の形象を扱ったものであり、そうした論考のなかで一般的には美しいとされえないようなものが図版とともに取り上げられている。例えば、人間の足の親指[2]や、花弁を剥ぎ取られ生殖器官を露出させられた花の写真[3]といったものである。こうした点から、先行研究では、バタイユが醜悪なもの、低俗なものをとおして、理想的で美しい形態（forme）に対する物質（matière）[4]の侵犯を物語っていたことが指摘されている。そして、これまで主に美学的な見地から、この不気味なものや肉体の生々しさに重きを置いた彼の思想が「不定形」（informe）や「唯物論」（matérialisme）といったテーマのもとで積極的に論じられてきた[5]。

とはいえ、バタイユにおける物質性の問題は彼の前期思想にのみみられる

＊立命館大学大学院文学研究科博士後期課程

ものではなく、それと同時に美学や芸術批評の領域に限定されうるものでもない[6]。それは、彼の思想全体の根幹をなし、中期思想に位置する「内的体験」の問題系を読み解くにあたって、最も重要な指標のひとつとなっている。なぜなら、この体験のうちで出会われる特権的な他者としての「未知のもの」（l'inconnu）が質料的な特徴を有しているからである。そして、1950年代というバタイユ思想の後期にあたる時期に構想された『非 - 知の未完了の体系』[7]の草稿においても、彼の物質性への問いを読み取ることができる。そこでは、「未知のもの」に関する記述が目立つと同時に、「もの性」（réité）の破壊、すなわち事物や対象としてのものの在り方の解体が肯定的に論じられていた。したがって、このような点から、物質性が前期から後期にわたって一貫してバタイユのなかで問われていたことはいうまでもない。さらに、論者の考えでは、この「未知のもの」が彼の「内的体験」のうちで万物の根源、つまりはアルケー（arkhē）のようなものとして描き出されている。というのも、「未知のもの」についての描写は、それが世界を成り立たせている基盤であるかのようなイメージを我々に与えるからである。そのため、バタイユにおける物質性の問題は、美学のみならず哲学によるアプローチが大いに可能なものだといえるだろう。

以上から、本稿ではまず『ドキュマン』時代の論考をもとに、バタイユの物質性への問いがいかなる考えをもとに生じたのか、そして彼のいう物質とはいかなるものかを検討する（第1節）。次に、前期思想における物質性の問題が、主著『内的体験』や上述した後期の草稿のなかでどのように展開されているのかを「未知のもの」に焦点を絞りながら考察する（第2節）。最後に、この「未知のもの」が「内的体験」のうちでアルケーのようなものとして機能していることを明らかにし、バタイユ思想を起源を追い求める特異なアルケオロジーとして描き出すことを試みる（第3節）。

1. バタイユの低次唯物論

それではまず、バタイユが雑誌『ドキュマン』に発表した論考を参照しながら、彼の物質性への問いがどのような考えを基盤に据えているものなのかを確認していきたい。

ここでは『ドキュマン』の「批評辞典」シリーズをみていこう。バタイユはこのなかでいくつかの語の定義を担当しているが、そのうちのひとつが「唯物論」であり、これについて次のように述べている。

> 唯物論者の大半は、あらゆる精神的実体を退けようと望んだにもかかわらず、諸事物についてのひとつの秩序を記述するに至り、その秩序は、序列をもった関わりからして、観念論に特有の性格を帯びている。彼らは〔…〕物質の観念的〔＝理想的〕な形態、つまりは他のいずれにもまして物質がかくあるべきものに近づくような、形態という固定観念に屈していることに気づかなかった。[8] (M179)

ここで彼は、観念論および既存の唯物論に対する批判を行っている。バタイユによれば、既存の唯物論は、諸存在者の本質を観念的なものとする考えに対立しているとはいえ、いまだ観念論的な汚染を免れてはいない。すなわち、唯物論がその根源性を主張する物質もまた、不生不滅で分割不可能な物質の最小単位としてのアトムのように、抽象的に捉えられた物質でしかない。そして、このような考えはなおも万物を成り立たせている実体や本質といった観念に捕らわれている。したがって、既存の唯物論で取り上げられる物質とは物質の観念であり、バタイユはこれを「死んだ物質」(matière morte)[9]と呼んでいる(M179)。こうした唯物論から、彼は自身が思い描く唯物論を区別し、次のように述べる。

唯物論という語が用いられるとき、それがいっさいの観念論を排した、あるがままの諸現象の直接的な解釈を指し示すときがきている。

（M180）

つまり、バタイユが唯物論という語で念頭に置いているのは、あるがままのものを抽象化することなしに理解する思考様式なのである。そして、この「あるがままの諸現象」が上述した「死んだ物質」とは異なるもの、いわば生きた物質だということになる。

ここから、この時期のバタイユが、観念や概念把握によって対象や世界そのものを捉える手法に何らかの違和感や嫌悪感を抱いていたことが読み取れる。それは、あるがままのものを何かとして把握することによって、それそのものを改変してしまうような態度に対する反論を含んでいる。ここに、対象をあるがままにとどめつつ、そのような対象との関係がいかにして成立するのかを模索する彼の思想の糸口をみいだすことができるだろう。そして、このような彼の姿勢が唯物論という名のもとで語られている以上、それは物質性に関する問いを孕んでいる。したがって、バタイユをこの問題へと突き動かしていたものは、上述したような観念や概念把握に対する否定的な見方だといえよう。

さて、バタイユがこのような考えをもとに物質性を問うているのだとすれば、ここでいう物質や「あるがままの諸現象」とはいかなるものだといえるだろうか。

以下では、同じく『ドキュマン』に寄せられた論考「低次唯物論とグノーシス」をみていくことで、彼の物質観に迫りたいと思う。このなかで、バタイユは物質ないしは「低次の物質」（matière basse）と「高次のもの」ないしは「高次の原理」（principes supérieurs）という対立するキーワードを用いて、この物質と原理の関係を次のように述べている。

> 私の理性によって限定された物質は、即座に高次の原理という価値をもつだろう。 (BMG225)

ここでいわれている理性による限定を、形相を与えること、と読み換えてもよいだろう。哲学史において、形相と質料の対概念がアナクシマンドロスのペラスとアペイロンにその起源をもつように、形相を与えることとはまさに限定することである。したがって、このような観点からすれば、「高次の原理」とはあるものを何かとして限定することによって捉えられたもの、つまりは観念や概念を指し示す語であり、先に述べた考えからすればバタイユの批判対象ということになる。これに対して、物質あるいは「低次の物質」が哲学の概念としては質料にあたると理解することができるだろう。実際、”matière” という語は単に物質を指し示すだけではなく、哲学における質料概念を意味する。だが、彼は自身のいう唯物論について再度説明を加えながら、この物質に関して以下のように述べている。

> 私が理解している唯物論とは、存在論を含まないものであり、物質を即自的な事物〔chose en soi〕とは解さない唯物論である。というのも、何よりもまず、いかなる高次のものにも、つまり私であるところの存在者や、この存在者を武装させる理性に借り物の権威を与えうるいかなるものにも、自己とおのれの理性を服従させないことが重要だからである。 (BMG225)

つまり、バタイユの唯物論で取り上げられる物質とは、決して目の前にあるコップなどといった事物ではない。事物はすでに質料が形相を与えられ成立しているものであるため、彼のいう物質とは異なる。そうではなくて、ここでの物質とは質料的なものではあるが、質料というひとつの概念に還元することもまたできないものである。言い換えれば、「低次の物質」を質料とし

て抽象化してしまえば、上記引用での「高次のもの」、すなわち形相や観念、概念などといったものに従属することとなり、バタイユの意に反する。そのため、彼はこの物質を、哲学でいうところの質料である、というように明確に規定することができない。したがって、彼のいう物質や「あるがままの諸現象」は特定の形相をもたないという意味で不定形で流動的なものであるのと同時に、質料概念にさえ閉じ込められないものなのである[10)]。

以上をとおして、我々はバタイユの物質性への問いが観念や概念把握として対象を理解する思考様式への批判のうえに成立することをみてきた。そして、彼の思想で問題となる物質が、哲学的には質料という一語で呼ばれうるものでありながらも、この概念のうちに決して回収してはならないものであることが明らかとなった。次節の議論を先取りすれば、バタイユはこの物質を「未知のもの」という語で表現するようになるが、これがひとつの意味に帰されることを避けるために、様々な言い換えや語り直しを行わざるをえず、その論述は非常に晦渋なものとなるのである。

2.「未知のもの」とその物質性

バタイユの前期思想にみられた物質性の問題は、中期以降いかなる展開をみせているのだろうか。本節では、彼の主著『内的体験』や『非 - 知の未完了の体系』草稿での記述に依拠しながら、中期・後期で語られる質料的なものに光をあて、その内実を探っていきたい。

中期以降、バタイユ思想の中核をなす「内的体験」には、主体と客体の問題をはじめ、この両者の「交流」(communication)、知や認識、言語やポエジー、絶対者などといった様々な問題が含まれている。物質性の問題もそのうちのひとつであり、これが「未知のもの」と密接に関連したかたちで論じられていた。この「未知のもの」とは、体験のなかで現れうる特権的な客体、他者であるとひとまず言い表すことができるものだが、次の『内的体験』か

らの引用ではこれに確固とした意味を与えることの危険性が指摘されている。

> もし私が「私は神を見た」と確かに言うとすれば、私が見るものは変化するだろう。理解できない未知のものの代わりに――私の前で荒々しく自由であり、私を自身の前で荒々しく自由にさせておく未知のものの代わりに――死んだ客体と神学者のものがそこにあるだろう。　（EI16）

ここでいわれているのは、「未知のもの」を神と規定することによって、あるがままの「未知のもの」が「死んだ客体」（objet mort）に変わり果ててしまうということである。これは前節で引いた「死んだ物質」に相当する議論だといえるだろう。つまり、「未知のもの」を何かとして概念的に捉えることは、これそのものを損なうことと同義であり、極言すればこれを殺すことに他ならない[11]。そのためバタイユは、「未知のもの」を限定ないしは規定する働きを危惧しており、そのような観念論的な汚染からこれを救い出そうとするのである。したがって、彼にとって「未知のもの」とは特定の形相をもたない質料的なものなのであり、前期思想における「低次の物質」や「あるがままの諸現象」の系譜に属すものだといえる。それは、ひとつの意味の枠内に押し込められえないという意味で「荒々しく自由」な物質なのである。

とはいえ、バタイユが「未知のもの」に絶対者や世界の基盤というイメージを重ねていることもまた否定できないだろう。これについて、『内的体験』の別の箇所をみてみよう。

> 「私はこのようなものを見た、私が見たものはしかじかのものである」と言うことはできない。「私は神を、絶対者を、あるいは諸世界の底〔fond des mondes〕を見た」と言うことはできない。「私が見たものは悟性を逃れる」としか言えず、神や絶対者、諸世界の底は、もしそれらが悟性

のカテゴリーに属さないのであれば、何ものでもないのである。

（EI16）

ここでも彼は「未知のもの」を任意の何かとして規定することを拒みながら、神や絶対者、「諸世界の底」といったものをこの近似値として我々に与えている[12]。このことは、後述するアルケーの議論にも関わってくるが、バタイユが質料的なものに何らかの特権的な要素をみていたことを示している。そのため、彼は宗教的なしがらみを排除しながらも、この「未知のもの」を我々の認識能力の及ばない至高なもの、体験において我々がそこへと導かれていく「極」（extrémité）として描き出すのである（EI58）。

『内的体験』にみられる以上のような議論は、1950年代に構想された『非‐知の未完了の体系』においてもなされる予定だったことが残された草稿から読み取れる。ここでも同様に、「未知のもの」が質料的なものであるのと同時に神的なものとして表現されていた。これについても以下で概観しておこう。

この草稿のなかで目立つのは、「未知のもの」と認識との関係、そしてこれと事物との関係である。バタイユは『内的体験』で述べたように、「未知のもの」が「悟性を逃れる」ことをここでは次のように言い表している。

私のいう未知のものとは、それに対して認識が影響力をもたないものである。（NC567）

もちろん、未知のものが私に対象として、ひとつの事物として与えられることなどありえず、私はそれを実体化することもできない。言い換えれば、私は未知のものを認識することができないのである。（NC565）

くりかえしになるが、彼にとって、我々の認識とは対象を何かとして捉える

ことであった。だが上述したように、「未知のもの」はそれが何らかの事物と見なされることで「死んだ客体」となってしまう。それゆえ、これそのものは我々の認識能力を越え出ており、我々は「未知のもの」に対してそれは何かと問うことはできない。これについてバタイユは「もの性」の破壊という語を用いることで、「未知のもの」がそれ自身において事物的な在り方を解体していく特性をもつことが指摘されている。ここでいう「もの性」とは、ガラスやスポンジといった、対象を何かとして把握したときの事物性である。そのため、この「もの性」の破壊とは、ガラスやスポンジという事物の意味を剥ぎ取っていくことであり、この剥ぎ取りによって「未知のもの」が姿を現す。そしてそれは、「未知のもの」それ自身による剥ぎ取りでもあることが次のように指摘されている。

> 至高なもの、神的ないしは聖なるもの、それはそこでものの破壊が生じるものだ。 (NC568)

ここに、「未知のもの」の動的な側面を読み込むことができるだろう。つまり、これは形相をただ受け入れるような受動的な質料なのではなく、ひとつの形相に帰着することから絶えず逃れ去っていく非受動的な質料、すなわち静態的ではありえない質料的なものだということである。「未知のもの」の「荒々しく自由な」側面とはこの「もの性」の破壊によるものであり、それこそがバタイユにとっては至高な在り方だといえよう。以上から、この草稿では、事物に対する「いっさいの限界の否定、いっさいの条件の否定」こそ「内的体験」の流儀であることが「未知のもの」との関わりのなかで明示され（Cf. NC568）、この「未知のもの」がそうした限界や条件としての事物性を絶えず打ち破っていく運動であることが見て取れる。

以上から、『ドキュマン』で語られた「低次の物質」や「あるがままの諸現象」は、それ以降のバタイユ思想のなかで「未知のもの」として展開され

てきたことが明らかとなった。そして、この「未知のもの」が認識や事物性との関わりのなかで形相を逃れる質料的なものとして表現されるのに加えて、これがもつ至高さや運動性が強調されていることがわかった。バタイユの「内的体験」が追い求める「未知のもの」がこのようなものである以上、我々はこの体験をバタイユ的な意味での唯物論として捉え直すことができる。つまり、「あるがままの諸現象の直接的な解釈」とは「もの性」の破壊をその流儀とする体験そのもののことであると同時に、そうした破壊を自身において生じさせる「未知のもの」をありのままに理解することだといえる。したがって、中期以降で語られる「内的体験」は、前期の唯物論の議論をそのまま引き継いでおり、そこでもまたバタイユの物質性への問いが展開されている。ただし、ここで気になるのは「未知のもの」につきまとう神的かつ根源的なイメージである。なぜバタイユは、これを特権視しているのだろうか。

3. 質料としてのアルケー

前節までの議論を確認するかぎり、バタイユがその思想の開始時から言及していた物質、すなわち「未知のもの」には神や絶対者といった世界の創造主たるイメージや「諸世界の底」といった世界の基盤というイメージが重ねられていた。そのうえ、以下でみるように、この質料的なものが万物の根源であるかのような表現が、彼の記述には散見される。それでは、彼は「未知のもの」をあらゆるものの起源、いわばアルケーとして想定していたとはいえないだろうか。

まずはこのような問いが依拠する彼の記述を取り上げてみよう。前期「低次唯物論とグノーシス」では、何かとは言いえないものが「それ」と呼ばれ、次のように述べられている。

> それが自我と観念の外に存在しているがゆえに、まさに物質と呼ぶべきものに私は全面的に服従しているのである。 (BMG225)

ここでは自我や観念的なものに対する外部として質料的なものが優位に置かれ、これに観念や我々が従属しているかのような考えが読み取れる。同様に、中期の『内的体験』からも、「未知のもの」が観念 - 概念 - 形相といったものの根底に設定されているように読める表現を引いておこう。

> 生は死のなかに没し去り、諸々の大河は海のなかに、既知のものは未知のもののなかに没し去る。 (EI119)

> 私を取り巻いている未知のもの、私がそこから生じ、そこへと向かうところの未知のもの〔…〕。 (EI157)

これらにおいても、何かとして規定されたあらゆるものが「未知のもの」へと回収されうることが示されている。すなわち、質料的な「未知のもの」は、既知のもの、つまりは形相を備えたものがそこへと帰されるところのものであり、私という主体それ自身の起源であると同時に、私が体験のなかでそこへと導かれていくものでもある。後期にあたる『非 - 知の未完了の体系』草稿でも「未知のもの」に関するこうした言い回しは受け継がれている。決定的なのは、バタイユが「未知のもの」に対して「神や物質といった語の意味は、最終的にはそこへと還元される」(NC566) と述べている点である。

以上のような記述から、バタイユが「未知のもの」にあらゆるものの起源を連想させるような要素をみていることは確かである。この質料的なものが万物の根源である、という図式は、哲学史において、アナクシマンドロスの無限定なものとしてのト・アペイロンがアルケーそのものであるという考えにも類似している。そのため、バタイユ自身が哲学史的な背景をまったく念

頭に置いていないとしても、これと同様のことを自身の「内的体験」において構想していたと読み込むことは可能である。そして、まさにこのような視点こそ、バタイユ思想研究において必要なものではないだろうか。彼自身が何をどのように理解していたのか、彼自身が目指していたものは何だったのかを問うことも勿論重要なことではある。だが、さらに一歩踏み込んで、思想史の流れのなかで彼の思想がどのような意義を有しているのかを考察することもまた必要である。このような考えから、バタイユのいう物質ないしは「未知のもの」に関する記述を追うことで、そこでの表現に基づいてこれをアルケーと読み換えることにも一定の妥当性が認められるだろう。

だが、注意しなければならないのは、「未知のもの」をひとまず質料的なアルケーだと形容できるとしても、それはバタイユが形相と質料の位置関係を反転させて、質料概念にその優位を認めたということではない。というのも、もしそうだとすれば、バタイユは自身が批判した観念論を脱していないことになるからである。そうではなくて、彼のいう物質や「未知のもの」は形相と質料という二元論を越え出た何ものかであった。つまり、質料をその近似値として挙げられるものでありながらも、質料という語や概念よりも過剰な何ものかである。前に挙げた引用では、質料概念にではなくこの過剰なものに我々が従属しているといわれている。それは、観念的に理解されるもののシステムの内部には存在しないものとしての外部である。したがって論者は、上記のようないかなる語にとっても過剰な物質、「未知のもの」がバタイユの体験のなかでアルケーとして機能しているという意味で、これをあえて質料としてのアルケーと名づけたい。

ただし、ここでいうアルケーは「未知のもの」の以下のような特徴からして、世界の説明原理として用いられる伝統的なアルケー概念とは異なるものだということをも論じておかなければならない。まず、我々は「未知のもの」を一語で名指しうるような言葉をもたないがゆえに、バタイユはこれを神や絶対者、「諸世界の底」といったふうに様々な語で言い換えている。そのた

め、「未知のもの」とはひとつの本質、ひとつの述語内容に還元されえないという意味で本質を複数的に有しているともいえるだろう。さらに、これを何かとして表現することは、つねにそのものの一部しか言い表せていないことになるため、「未知のもの」は我々の認識が十全に捉えられないものとして逃げていく。こうした理由から、「未知のもの」はそれを出発点として世界を説明しうるような確固たる原理ではなく、アリストテレス的な不動の動者として、それ自身静態的でありながら、あらゆるものを動かしているわけでもない。それは「つねに遠ざかっていく極」（EI58）として描き出されるアルケーであり、その動的な性質、無限に後退していく特性からして起源なき起源なのである。そしてこのことは「内的体験」の不完全性とも密接に関係している。バタイユの弁によれば、この体験は「未知のもの」を決して我有化しえないことによる絶望の体験（Cf. NC565）であると同時に、それでもなおこれを捉えきれないままに愛することを幾度もくりかえす挫折と失敗の体験である。したがって、「内的体験」をアルケーとしての「未知のもの」を求めつづけるアルケオロジーと呼ぶとしても、それはアルケーが逃走していく不可能なアルケオロジーなのである。

おわりに

本稿では、バタイユ思想における物質性の問題に着目することで、次のことが明らかとなった。まず、彼が観念論批判をもとにこの物質性を問いつづけていたこと、そして彼があえて "matière" という語で名指すものは、形相と質料の二項対立を越えた何ものかであり、特定の何かに還元されることのないものだということである。そして、このような物質は、前期から後期にわたって「低次の物質」から「未知のもの」へとその名を変えながら、一貫してバタイユの問題関心の中心にあったといえる。そのうえで、論者は「内的体験」を彼のいう意味での唯物論として再解釈した。これは「未知のもの」

をあるがままにとどめつつ、それを言語や概念といった媒介なしに理解しようとする姿勢として体験を捉え直したということである。最後に、この唯物論としての「内的体験」を一種のアルケオロジーとして描き出すことを試みた。これはフーコーの鍵概念であるアルケオロジーとも、始原を探究する学としてのアルケオロジー一般とも異なる。というのも、「未知のもの」は根源的なものとして表現されているにもかかわらず、自身に対する規定を無限に逃れ去っていくことで我々を起源の無限遡及に陥らせ、決して捉えきれないアルケーとなるからである。それはいわば起源なき起源であり、もはやアナルキア（anarchía）と呼ぶにふさわしいものかもしれない。この不可能なアルケオロジーが、アルケオロジー一般の問題史においていかなる意義をもちうるのかを探ることが今後の課題となるだろう。

バタイユ思想に対する上記のような読解は、これを可能なかぎり哲学に引き寄せたものである。それは、これまで広く理解されてきた哲学の批判者としてのバタイユ像に変更を迫ることとなるだろう。確かに、バタイユ自身の記述には哲学に対する非難や嫌悪が多くみられはする。しかしながら、はたして彼の思想は近代哲学ないしは形而上学を脱しているといえるのだろうか。根本的な批判たりえているのだろうか。本稿で論じた物質性の問題からすれば、彼が自身の思想において何らかの根源的なものを設定せざるをえなかったこと、そして到達不可能とはいえそこへと向かっていく姿勢が読み取れることから、なお哲学内部にとどまっているバタイユ像がそこにはみいだされる。そして、彼自身、今回取り上げた草稿のなかで「哲学の問題は限定された諸客体の認識から在るものの総体の認識への移行である」(NC572) と明確に述べている。これは、「あるがままの諸現象」をそのままに理解することへの移行だと捉えることができるだろう。つまり、バタイユは「内的体験」において既存の哲学が扱ってきた問題を自分なりの仕方で拡張しようとしていたと考えられるのである。

以上から、本稿では物質性の問題に着目することで、バタイユ思想を哲学

へとつなぐ結節点を得ることができた。それは、これまでのバタイユ像を刷新する可能性を有していると同時に、哲学史のうちに彼を位置づける手がかりになるともいえる。バタイユが哲学に対してどのような態度を取っていたのか、そして意識的であれ無意識的であれ、彼の思想が哲学といかなる関わりをもっていたのか。ジャン＝リュック・ナンシーらの思想に代表される現代哲学におけるバタイユの影響を鑑みても、まさにこうしたことを問うべきときがきている。

【凡例】

ジョルジュ・バタイユの著作からの引用はすべて *Œuvres Complètes*, Tome I ～ XII, Gallimard, 1970-1988 を底本とした。引用の際には略号と頁数によって引用箇所を示す。
日本語訳のあるものについては適宜参照したが、引用はすべて拙訳を試みた。
引用文中における強調はすべて原文によるものである。
引用文中の省略は〔…〕にて、論者による補足は〔　〕にて表記する。

【略号表】

M : Georges Bataille, « Matérialisme »（1929）, in *Œuvres Complètes*, tome I, Gallimard, 1970.
BMG : Georges Bataille, « Le bas matérialisme et la gnose »（1930）, in *Œuvres Complètes*, tome I, Gallimard, 1970.
EI : Georges Bataille, *L'expérience intérieure*（1943）, in *Œuvres Complètes*, tome V, Gallimard, 1973.
NC : Georges Bataille, *Notes—Conférences*（1951-53?）, in *Œuvres Complètes*, tome VIII, Gallimard, 1976.

註

1）バタイユのいう「内的体験」は、主体と客体との明確な区別が消え去る主客の混融の体験として語られる。したがって後述する「未知のもの」を体験のうちで出会われる特権的な他者として便宜上説明してはいるが、それが、私が身のまわりの事物や他人に接するときのような通俗的な主体 - 客体関係とは異なる関係のうちにあるものだということに留意する必要がある。本稿では精査を行わないが、この点に関しては湯浅博雄『翻訳のポイエーシス』（未來社、2012 年）の「エロティシズムと〈存在の連続性〉」の章が詳しい。

2）Cf. « Le gros orteil », in *Œuvres Complètes*, tome I, Gallimard, 1970, pp. 200-204. 初出は

以下のとおり。*Documents*, nº 6, novembre 1929, pp. 297-302.

3）Cf. « Le langage des fleurs », in *Œuvres Complètes*, tome I, Gallimard, 1970, pp. 173-178. 初出は以下のとおり。*Documents*, nº 3, juin 1929, pp. 160-168.

4）ここで形態と物質と訳出した "forme" と "matière" は、哲学において形相と質料を意味する語である。本稿ではバタイユの引用文に登場する "forme" と "matière" を形態と物質と訳しつつ、哲学に引き寄せながらこれらを論じる際には、それぞれを形相、質料に読み換えている。

5）美学におけるバタイユの先行研究としては、まず Georges Didi-Huberman がその全体を「不定形」解釈に捧げた大著、*La resemblance informe ou le gai savoir visuel selon Georges Bataille*（Macula, 1995）が挙げられる。ここで Didi-Huberman は、主に類似と弁証法という概念装置によって「不定形」に対する考察を行っている。そして、バタイユ思想において重要な「侵犯」（transgression）というキーワードをも用いながら、「不定形」が「形態を侵犯すること」であると同時に「形態に抗する物質、形態に触れ、ときとしてこれを食らってしまう物質」（*Ibid.*, p. 21）であることを示している。また、Didi-Huberman が本書で言及している Rosalind E. Krauss も、Yve-Alain Bois とともにバタイユの「不定形」からインスピレーションを受けて書かれた *Formless : a user's guide*（Zone Books, 1997）を著している。これもまた美学的な視点によるものだが、Didi-Huberman の用いた弁証法という概念に彼らは批判的な態度を取っており、バタイユ思想を弁証法的なものではないという考えを本書で示している。その他、バタイユを美学という枠組みのなかで主に論じている研究者としては、日本の江澤健一郎が挙げられるだろう。

6）単なる美学や芸術批評とは異なる文脈でバタイユの物質性の問題を取り上げた研究として、論者は以下のものに注目している。『ドキュマン』の文脈を越えて、バタイユ思想を網羅的な仕方でもって二元論や唯物論と関連づけて論じた Denis Hollier の « Le Matérialisme dualiste de Georges Bataille »（in *Tel Quel*, nº 25, printemps 1966, pp. 41-54）。そして、バタイユの「不定形」を世界の他性化という観点から論じている Boyan Manchev の *L'altération du monde : pour une esthétique radicale*（Ligne, 2009）など。とはいえ、本稿で提起したように、アルケオロジーという主題を明確に打ち出してバタイユ思想を捉えようとしたものは、現時点では先行研究にはみられない。

7）*Le système inachevé du non-savoir*. これは 1954 年に「無神学大全」という構想がはじめて公にされた際、その第 5 巻としてバタイユが挙げていた書名である。「無神学大全」とは、彼の主著『内的体験』をはじめとする、主に 1940 年代に刊行された著作をまとめた総称である。だが、この計画は実現されず、現在では『内的体験』、『有罪者』、『ニーチェについて』が「無神学大全」と呼ばれている。バタイユはこの書き上げられなかった『非 - 知の未完了の体系』を 1951 年から 53 年頃にかけて執筆していたとされている。

8）本文中で「実体」と訳出した語は ”entité” である。哲学において実体を指し示す場合、一般的には ”substance” が使われるが、この論考ではバタイユが諸事物を成り立たせている ”essence”（本質）に応えうるものとして ”entité spirituelle” が挙げられているため「精神的実体」と訳した。

9）第 2 節で取り上げるが、ここにはすでに、中期の主著『内的体験』で批判的に語られる「死んだ客体」の萌芽がみてとれる。後述するように、バタイユは何かとして把握され、概念化されてしまったもの一般を、あるがままのものではないとして「死んだ」という形容詞で表現している。

10）バタイユのいう物質が質料概念でさえないものであるとしても、彼はこれをあえて ”matière” と名づけている。こうしたことは 1945 年の『ニーチェについて』にもみられる彼のエクリチュールの手法であるといえるだろう。バタイユはそこで頂点と衰退という対立概念を善と悪に関連づけながら論じ、頂点を善よりも悪に近いものと規定している。だが、彼が念頭に置いている頂点とはむしろ善悪の対立を越えたものであり、悪とすら名指しえないものである。このような図式は、本稿で取り上げた物質や形相と質料の二元論についてもあてはまる。

11）Cf. Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, 1947, p. 372. バタイユは 1930 年代にパリ高等研究学院で行われたコジェーヴの『精神現象学』講義に出席しており、概念把握の議論をはじめ彼から多大な影響を受けている。

12）厳密にいえば、哲学での議論において、絶対者とアルケーは重なる要素をもちながらも異なるものである。だが、バタイユはここで、神や絶対者と世界の基盤を並列に置いており、それらの哲学史的な差異については言及していないため、本稿でも彼の考えに則った論述を展開している。とはいえ、この差異については稿を改めて論じることとする。